

論文の内容の要旨

論文題目：川端康成の文体と身体

—日本語の小説における声の論理の働きをめぐって—

氏名：平井 裕香

本博士論文は、川端康成の小説を、それが書かれる文体とそこに書かれる身体の密接なかわりに注目し、抜本的に読み直した。川端が日本の近代を代表する作家としてカノン化されていったのは一九五〇年代だが、それは川端のイメージが日本と女の美しさを描いた男性作家として固定される過程でもあった。八〇年代末以降、国内外で高まった川端文学と全体主義や異性愛男性中心主義の共犯に対する批判は、そのような作家像のもと小説を評価することの政治的な不適切さを剔抉したと考えられる。九〇年代後半からは、そうした批判に応える形で、川端文学の生成・受容の背景の詳細な検討とオルタナティブな読解の可能性の追求が、アカデミズムの垣根を越えて盛んに繰り広げられている。本論文は、以上のような川端研究・批評の展開および文学一般に関する近年の議論を踏まえ、地の文以外の部分を含めて、何をいつどのような声によって語るかを選択する主体として作者の川端を捉えることで、川端の小説と日本および女の間を問い直し、未だ十分とは言い難い代表作の再読と川端の文学史上の位置の明確化を試みた。

第一章は総論として、川端康成の小説が、ある言葉をどのような声によって語るかという声の論理に基づいて、ある瞬間の認識の否定を伴うリアリティを構成していることを、歴史的かつ理論的な考察を通して推定した。一九六〇年の大江健三郎の評論からは、川端文学を特徴づける曖昧さの内実が、作者と作中人物の声の境界の不明瞭さと、二つの声の関係の両義性であることがわかる。そうした声の曖昧さは、近代-西洋化の一環として明治時代に遂行された、「言文一致」と総称されるラディカルな文体改変が、日本語の小説にもたらした曖昧さに連なっている。それはまた、戦間期に隆盛を見た、心身を不可分なものとして描く

潮流の「モダニズム」を経て、作者と作中人物の身体の境界の不明瞭さと、二つの身体の関係の両義性ともなっている。一九二〇年代から六〇年代に発表された川端の小説は、以上のような文体・身体両面における曖昧さを抱え込んでいるために、不可逆に流れる時間との緊張の中で高まってゆく情動、すなわち名づけを経ない間主観的な身体性の表現となると考えられる。

第二章以降は各論として、ある言葉をどのような声によって語るかが、一貫して、かつ絶え間なく発展を遂げながら、単一の主体の認識への固着を阻む否定性を小説にもたらしめていることを、川端の個々の作品の分析を通して明らかにした。

第二章では「非常」（一九二四）と「処女作の祟り」（一九二七）が、それぞれ時間と回路の面で、語る自己と語られる自己の間に両義的關係を作っていることを論じた。「非常」の「私」が恋人の手紙について悩む時点は、手紙を受け取った時点とも小説を書く時点とも確定できなくされている。そうした「私」の二重化により、恋人からの別れの手紙を、かつての自己の解釈の独善性を反省しながら今また解釈し直している、「私」の情動が示されている。他方で「処女作の祟り」は、「僕」が読者に処女作が祟ったことを告白する文章としてのみならず、元恋人に処女作の祟りを及ぼす文章としても読めるようになっている。その二つの解釈が、それぞれ異なるレベルでの虚実の往還を伴うために、「僕」の魔力は完全な否定も肯定も不可能な存在感を持つことになる。

第三章では「十六歳の日記」（一九二五）が、他者もしくはかつての自己の言葉の受け手としての「私」の隠蔽と露出を繰り返し、重層的なリアリティを生んでいることを指摘した。一六歳時の日記の部分は、発言の聞き手としての「私」を多くの箇所では省略しつつ、「私」の身体の動揺をしばしば指示することにより、発言が引き出す情動を読者に想像させている。そして小説全体は、終盤まで後景化した日記の読み手としての作者を、最後の日記への解説で遡及的に前景化して、作者が日記に呼び起こされる分節不可能な感情を読者に思い描かせている。そのように「私」の感情を、それぞれ非常に多義的な二つの層を持つものとして読者に伝達することで、自己に応答を求め続ける圧倒的な他者として祖父が物語られている。

第四章では「浅草紅団」（一九二九～三〇）が、前半においては語る「私」と語られる「私」の間の距離、後半においては書く「私」と「私」以外の人物の間の距離を様々に変え、自らの身体を商品とする女性たちの苦しみを、「底の知れない」ものとして描いていることを明らかにした。前半において語る「私」と語られる「私」の間の距離を言葉によって指示していたのも書き手の「私」とみなすなら、「私」は同作全体で地の文と人物の発言の間や挿話の間を架橋して、重層的な解釈へ読者を導くことにより、通俗性と批評性を両立させていたと言える。そうして読者に分裂を強いる作者の働きは、映画との関与を通して発見されたと考えられるとともに、物語の展開を規定する鏡に象徴されながら、敗戦後の小説にまで継承されると思われる。

第五章では「禽獣」（一九三三）が、指示対象を持たない「彼」を、読書で得られた認識

がそこに代入されると同時にそれとともに相対化される、語りの消失点または読者の鏡像に設定し、千花子との心中未遂という一回的な出来事の重みと、その出来事に囚われて繰り返し弄んできた動物たちの命の重みを、二つながら相乗的に表現していることを示した。読者は「彼」に同一化して、人間との結婚と動物の愛玩のみならず心中を結びつける歪な感受性を身につける一方、小説全体の構成や女中の発言に促され、必ずしも「彼」が自覚していない千花子や動物への暴力を理解することになる。そうした相反する解釈に読者を引き裂く作者の機能は、時間をめぐる表現や文末・指示表現、および物語の空白に見て取ることができるだろう。

第六章では「雪国」(一九三五～四七)が、島村を読者の鏡像として、女への応答の必要とその不可能性の中で読者を引き裂いていることを、一九四八年の「決定版」から明らかにした。島村の認識の反映と捉えられてきた地の文は、実際はまるで鏡のように、島村の感動や官能を、それらを成立させている女との非対称な関係と合わせて表象している。女が物語世界において島村に向ける発言、特に島村の発言や地の文と同じ語を含む発言は、そうした地の文とかがかわることで、読者が小説を新たな姿勢で解釈し直すきっかけとなる。とりわけ、強いまなざしを伴う女たちの声や、駒子と葉子が互いについて語る言葉が島村の身体を揺り動かすさまは、女を觀賞や性愛の対象とみなすことをやめ、間主観的な認識を織り上げるよう読者を促す。

第七章では「波千鳥」(一九五三～五四)が、前編「千羽鶴」(一九四九～五一)の物語を規定していた女性嫌悪に菊治が改めて向き合う未来を暗示していることを論じた。「波千鳥」の地の文は、あざに呪われた菊治の像を読者に思い描かせながら、読者が描き直せるような曖昧な像に留めている。ゆえに、読者は文子の手紙を読み進めるプロセスで自らの意識に浮上した、菊治があざに呪われる物語に底流していた父の欺瞞と暴力を、「今」の菊治の無意識に刻まれているものとして物語に差し込んでゆく。文子の手紙のどれだけが菊治に焼かれず残されるかが、書く最中の文子の涙と読後の菊治の手のふるえをどれほどのものとみなすかに結び合わされているために、小説を解釈することは文子への応答を選択することに等しい営みになる。

第八章では「眠れる美女」(一九六〇～六一)が、女性に対する暴力を回避できない近さまで読者を招き入れるかのように、江口の暴力の内実を読者に選ばせることを示した。同作は物語の展開により、性器の入り口と処女膜という二つの境界に江口を出会わせ、女体に厚みを持たせると同時に、呼称の使い分けにより、性的能力を隠すだけでなく〈不能〉を抱え込んでいる、江口の身体の両義的性格を際立たせている。〈不能〉と性的能力は、それぞれ女体の内部に残る痕跡へのこだわりと、女体の表面を拡張する能力と捉えることができ、第五夜における女性の死は、二つの交錯が引き起こす江口の殺人と位置づけられる。頻りに書かれる女性の匂いは、そうした江口の殺人を強くほのめかすとともに、暴力を匂わせるという同作の方法を象徴している。

第九章では「たんぼぼ」(一九六四～六八)が、語りの消失点となる作中人物を曖昧にし

て、複数の主体の経験を糾合したリアリティを生んでいることを指摘した。稲子が父の墜死を「欠視-幻視」する場面では、作者と稲子の距離の揺らぎと多様な文末・語末を通じて、視覚以外の感覚と記憶によって増幅された恐怖が表現されている。さらに、その墜死のさまが、稲子の母や恋人の久野に内的焦点化して語られていた可能性が後に作り出されることで、稲子の言葉が事物に与えた存在感が示されている。母の手のひらに蘇る不在の稲子の肌触りは、母の言葉と身体のあるようが対応しているゆえに、そうして言葉が事物に与える存在感のみならず、文体上の「人体欠視」を特徴とする日本語の小説がもたらすリアリティの典型と解釈することができる。

以上を踏まえて本論文は、作中の出来事を直に経験するかのように生々しい、しかしリニアな時間の中での単一の主体の認識に還元できないリアリティを構成する作者として、川端康成を捉え直した。川端の作品を典型として分析する過程を通し、何をいつ語るかという意味の論理と合わさることで、論理的かつ感覚的な否定性を生み出すという、日本語の小説における声の論理の働きを浮き彫りにできたと考えている。そうした否定の力こそ、東西冷戦の時代におけるカノン化によって抑圧された川端文学の価値であり、川端文学を経由して現代文学に継承された文学の意義ではないだろうか。

(三九九七字)